

# 高等学校地理歴史科における 記述力向上に関する実践的研究

学籍番号 (189978)

氏名 (出口 遼)

主指導教員 (田中 満公子)

## 1. 背景と目的

PISA 調査 (2015、2018) の結果によると、特に情報を整理し、事実や自分の考えを書くことに課題があると指摘されている。また新学習指導要領でも、各教科で論述・説明など書く活動に取り組むことの重要性が示されている。特に社会科 (地理歴史科) では、社会的事象の意味や特色について比較したり関連付けたり、さらにそれらを多面的・多角的に考察したりして、その考察したことを表現することが求められている。社会科においても、「言語活動の充実」が叫ばれるが、言語活動に関する学習は時間がかかり、特に高等学校では、まだ実践事例も多くないためか、取り組みが進んでいるようにはあまりみえない。

そこで、本実践研究では、高等学校地理歴史科において生徒の記述力を向上させることを目的に、短時間で記述活動を充実させるための書き方指導を含む方略指導や、それを意図した学習活動を行うことで、社会的な見方・考え方を書かだけでなく、多面的・多角的に考察をし、その考察を説明することができるようになるための記述力向上を図った。

## 2. 研究方法

本実践研究では、まず実践対象の生徒たちの記述力やどのような工夫を講じれば、より実践的かつ生徒が記述することができる問題になるのかの調査 (第2章)、そこでの実態を踏まえ、記述のための書き方指導を行った後 (第3章)、これらを踏まえて、生徒が多面的・多角的に考察し、それを説明することによる記述内容の充実、さらなる記述力向上を狙った記述活動を行った (第4章)。

第2章では、普段記述する機会が少ない生徒に、地理歴史科 (世界史) の授業の中で、記述の機会を与え、どのような工夫を加えることが、より実践的かつ記述することができる問題となるのかを検証した。また検証と振り返りシートを通じて、生徒が記述することができない理由を探った。

第3章では、第2章と同様に生徒に記述をさせた。その際に、自分の考えをまとめさせやすくさせるなど書く活動を充実させるため、新たに筆者独自に作成した定型文や記述のための要素 (5W1H1R) などの書き方指導を行うことで、プランニングの段階の負担軽減や、記述するための手立てを入手することによる、記述力の向上を評価した。

第4章では、第2章と第3章の実践を踏まえ、それらを組み合わせた記述指導を行った。土台となる記述のための書き方と、社会的な見方・考え方を説明した記述を踏まえ、次の段階にある多面的・多角的に考察し、それを説明することに焦点を当て、記述内容の充実と多様性を通じた記述力向上のための手立てを、評価の在り方も含めて明らかにしていった。

### 3. 授業実践

大阪府立 A 高等学校で授業を行った。1 年生のクラスを担当し、授業時数はそれぞれ 1 クラスあたり、第 2 章では 4 時間、第 3 章では 2 時間または 1 時間、第 4 章では 3 時間であった。第 2 章は 中華民国（清の滅亡、辛亥革命）と第一次世界大戦（背景、引き金）、第 3 章はナポレオン（皇帝前、皇帝後）、第 4 章は独立後のアメリカ（拡大、南北対立の理由、南北戦争）の単元を扱った。

### 4. 結果

振り返りシートから生徒は、「書き方が分からない」などの意見が多くあったことから、記述活動に対する苦手意識を持っていることが分かった。また第3章の実践では、筆者独自で作成した定型文と基礎的な記述についての要素などの指導によって、生徒に原因・目的、結果・影響を意識化させることで客観的に記述できるようになり、多くの生徒が因果関係を比較や関連付けながら、まとめ記述できていた。さらに第4章の実践では、多面的・多角的に考察したことをもとにして、事象の比較などの活動を意図的に行わせることで、より深まり記述内容が充実することが分かった。

### 5. 考察

第 3 章の実践において、文章を作成するための要素とそれを支援する定型文を獲得することは、記述の際のプランニング段階の軽減を含め、記述するための手段を保有していることで、記述力を向上させたと考えられる。そこから、第 2 章の調査で把握した生徒の実態に合わせたこの実践は、生徒に適切であったと考えられる。また第 4 章の実践では、事象を捉える側面や立場を明確にする記述は、より思考が深まり記述内容が充実することが分かった。しかし、多面的・多角的な視点を踏まえて記述することは難しいことが分かった。加えて、本章の実践では、書き方指導と学習内容に適した事象の捉え方を土台とするとともに、生徒の成熟の度合いを踏まえて多面的・多角的な考察を行う場面を設定していく必要があることが考えられた。

### 6. 今後の課題

生徒の記述には用語の不適切な使用や言葉の過不足があり、これらを解消するために自分が書いたものを評価・推敲する活動が必要である。生徒が書いたこと・考えを変えたときに注目し、その理由を探ることで、生徒は自身の学習状況を、教師は生徒の思考・記述の変容状況を、より正確に把握できることで記述力向上につながると考える。また、書き方の習得と基礎的な社会的な見方・考え方の記述ができる土台を作ってから、「多面的な考察→多角的な考察→多面的・多角的な考察」といったスパイラル構造を意識することで、多面的・多角的な考察が身に付くのではないかと。

最後に、本実践研究はどれも短期的な実践であり、記述指導の効果の継続性の検討や長期的な実践による効果の検証を行う。また、記述力等の言語能力の育成は教育課程全体の課題であるため、本実践研究での指導や効果の他教科への影響を検討する。

